



館長だより

山形県産業科学館

令和6年10月31日(木)

発行 館長 加藤 智一

県工の閉校式

山形県立米沢工業高等学校は、明治30年、市立工業学校として創立し、全国で6番目に誕生した工業学校として、以来127年もの間、県工の愛称で親しまれてきた伝統校です。校歌は大正15年9月15日に制定され、歌詞は、「荒城の月」の作詞者であり、英文学者の旧制第二高等学校教授 土井晩翠氏によるもので、曲譜は、「赤とんぼ」、「この道」及び「からたちの花」などの作曲家であり、NHK交響楽団の母体である日本交響楽協会創設者の山田耕筰氏によるものです。この伝統と格式のある校歌も来年からは歌われなくなるのかと思うと、悲しい気持ちでいっぱいです。と言うのも、来年度からは、米沢商業高校と統合し「米沢鶴城高校」として、新たなスタートを切る事になったからです。

10月24日、米沢工業高校の閉校記念式典がありました。在校生はもちろんですが、昭和62年から新採教諭として15年間お世話になった私としても、感慨一入であります。当時共に教員生活を送っていた懐かしい先生も数名いらしていましたが、さすがに70歳代以上の大先輩はおられず、期待して参列したのですが、残念な気持ちもあります。私もこの場に参列している方々から見れば、十分年配なのかもしれないと自覚したしだい。式典では、現生徒会長の3年 潟湊美咲さんが「米工の思い出と誇りを胸に、未

来を歩んでいく」と挨拶されていました。潟湊？ン？ そう彼女、彼女の父上の担任は私なのでした。そういえば、26年前、旧校舎最後の大運動会。優勝したのは、私達「工業化学科」なのです。「土木科」の者達が、「女子が多いから何々」とか「団体種目がどう」とか、どんな言い訳をしようが、優勝は私達「工業化学科」なのです。帰り際に目にした置賜地方のケーブルテレビNCVでは、思い出の米工大運動会の様子が放送されていました。最後の最後には、私の姿もちょっぴりだけ写っていて、体型変化なしの現実に笑いました。

映像に残る、はち切れんばかりに若さ爆発の米工生。そして、コロナ禍を経験し、耐えることを、我慢することを強いられた米工生。20年先、30年先に「米沢鶴城高校」の生徒達は、君達が活動する姿を見て何を思うのでしょうか。「工業報国」の気概、そして、「朝礼訓」にある「自己の本文は自ら進んで尽くそう」の思いは、忘れずに受け継いでもらいたいと切に望みます。

- 一、藩祖と中興 二公のやしろ
近くに我等の 校舎ぞ立てる
舞鶴城の名 薫を留め
時世の文章の 光と共に
遺風を仰ぐや 数百の健児
- 二、吾妻は雲間に 松川長し
大地に根を据え 大空凌ぎ
滴を集めて 海にぞ注ぐ
その山 その水 無言の教
くめども尽させぬ 意味こそこもれ
- 三、染織 建築 機械に工化
電気と土木と その科を分ち
青春望の かがやき満ちて
日に日に進みて 倦む時なかれ
「工業報国」われわの理想

